

155 Simon Radowitzky

タイトル 囚人155号 - シモン・ラドヴィツキー

155 Simon Radowitzky

著者 アグスティン・コモット Agustín Comotto

出版社 ノルディカ・リブロス Nórdica Libros

出版年 2014年

ページ数 270ページ

言語 スペイン語（部分的にイディッシュ語が登場するが、その都度説明あり）

読者対象 社会思想史に関心がある人、映画好きな人

ジャンル 歴史、伝記、ヒューマン

レポート作成 國貞俊兵

概要

冊を超える参考資料の他、著者コモット自身の父親や当時を知る人が語った内容を基にストーリーが構成されている。ユダヤ系ロシア人として生まれたシメーレ少年が、悲しみ、怒り、憎しみを抱えつつ、どのように不屈のアナキスタ、シモン・ラドヴィツキーへと成長していったのか

強い信念に貫かれたその人生を、初恋の人リュドミラへの語りかけと回想を軸に展開していく。

主な登場人物

：主人公。ロシア時代はシメーレ、アルゼンチン時代以降はシモン、刑務所内では囚人番号の「155」や「露人」などと呼ばれる。

リュドミラ：ラドヴィツキーをアナキズムに導いた初恋の女性。

サンペドロ：ウシュアイア刑務所の所長。ラドヴィツキーを目の敵にしている。

フェドセイ：無政府主義者。逮捕を拒み自死。その生き様はラドヴィツキーに大きな影響を与えた。

ルイーダ：イタリア移民の子供。ラドヴィツキーの友人。

ファルコン：ブエノスアイレス警察署長。ラドヴィツキーにより暗殺される。

レイナルダ：バルセロナで知り合ったメキシコ人女性。ラドヴィツキーは彼女にリュドミラの面影を見る。

サルバドール：ラドヴィツキーの支援者。アルゼンチンの女流詩人で戯曲家。

ロディオン：ラドヴィツキーのロシア時代の仲間。ラドヴィツキーをアルゼンチンに逃がす手引きをする。

あらすじ・内容

第一部 シメーレ 300粒の光 (P.5～124)

個の小さな穴から漏れる光を見上げた。朦朧とする意識の中で、光の粒は降りしきる雪に姿を変え、ラドヴィツキーを故郷エカテリノスラフまで運んでいくのだった。しかし、その回帰は少年時代への郷愁だけでなく、生涯忘れることのできない辛い記憶を伴っていた。

冬のある日、シメーレ（シモンのイディッシュ語名。以降、ラドヴィツキーで統一）らユダヤ人が暮らす集落は、コサックによる焼き討ちに遭う。急いで穀倉に身を隠し命拾いしたラドヴィツキーは、無残な姿に変わった幼馴染のディミトリを見つけ悲しみと同時に強い怒りを覚えた。「あの日、私はたくさんのことを学んだ」。この迫害の経験は彼の活動家人生の源流となった。

その後、錠前屋に弟子入りしたラドヴィツキーは、ふたつの運命的な出会いをする。ひとつは、仕事場に置かれていた、ロシア人革命家ピョートル・クロポトキンの著作である。ラドヴィツキーは「神様のことが書かれていない」その本に驚き、寝床の中で読み耽った。そしてもうひとつは、錠前屋の娘で、クロポトキンの本の持ち主、リュドミラであった。大学生の彼女はラドヴィツキーにとって同じ理想を有する同志となり、初恋の女性ともなった。

歳のラドヴィツキーは、ソビエト委員として労働者の集會に初めて参加する。そこで知り合ったアナキスト、フェドセイはリュドミラ同様、彼の人生に大きな影響を与える人物となる。

ストライキ当日、体制派は労働者を抑え込もうとコサックを動員してきた。ラドヴィツキーは混乱に巻き込まれ、人事不省となる。意識を取り戻した彼は警察に連行され、フェドセイが捕縛を拒み自ら命を絶ったことを知らされるのだった。

警察に目を付けられる存在になってしまったラドヴィツキーに、父はアルゼンチンに行くよう勧めた。ソビエト委員の仲間であるロディオンたちの手引きで渡航の準備が整えられ、港近くのアジトでリュドミラの到着を待ったが、彼女が現れることはなかった。

一方、現実のラドヴィツキーは脱獄を試みる。が、失敗。再び加えられる暴力。起き上がることもできぬまま、背

中に300の光の粒を感じながらラドヴィツキーは自分が生きていることを確認し、自由の夢を見るのだった。

第二部 シモン 未来を生きる (P.125～202)

初めてアルゼンチンに上陸した日をラドヴィツキーは思い出していた。整然としたブエノスアイレスの町並みを眺めながら、「ここには、コサックがいない」と思っていたことを。

ある日、ロシアで死んだフェドセイの友人、ピョートルと出会う。ピョートルは、警察署長ファルコンの冷徹さを語って聞かせた。ラドヴィツキーは次第にアルゼンチンの闘争にも身を投じて行くことになる。

日、メーデーの集会に来ていた無抵抗の市民に向け、現場を訪れたファルコンは発砲を命じた。次々と銃弾に倒れる人々。「ここもロシアと同じだ...」。コサックによる虐殺がラドヴィツキーの脳裏をよぎる。後日、ファルコン暗殺を試み取り押さえられるピョートルを見た彼は、今度は自分がやる、と決意する。「コサックに殺された人たち、メーデーで死んでいった人たちに報いるため、ディミトリ、フェドセイ、ピョートルに報いるため」に「おれはコサックを殺す、ファルコンを倒す」。

月の日曜日。ラドヴィツキーはファルコンが乗った馬車に手製の爆弾を投げつけた。暗殺は成功する。すぐに自らの胸にピストルを向け自殺を図るものの、彼はフェドセイのように死ぬことは出来なかった。判事が未成年のラドヴィツキーに下した判決は無期懲役。アルゼンチン最南端のウシュアイア刑務所に船で移送され、刑務所長サンペドロから非道な扱いを受けながら、長きにわたる監獄生活を送ることになる。

歳になったラドヴィツキーは、支援者サルバドラーらの働きかけもあり、イリゴージェン大統領から出所を認められる。刑務所の外では子供たちが駆け寄り、大人たちが話しかけ写真を撮ろうとする。彼は有名人になっていた。

港のベンチでぼんやりしていると、刑務所長サンペドロが近付いてきて隣に座った。「お前は恐れというものを知らん。二度と囚人にはなるな」。青年期の彼を痛め続けた人物が去って行くのを見送りながら、ラドヴィツキーは心の中で呟いた...リュドミラ、君のおかげで生き延びることができた。これから先は、君に頼らずに生きて行かなければ...

イリゴージェンは釈放こそ許可したが、ラドヴィツキーがブエノスアイレスに戻ってくることを認めなかった。「さらば、アルゼンチンよ」。ウルグアイに向かう船の甲板に立ち、ラドヴィツキーは遠くなっていく大地を見つめ続けた。

第三部 ラドヴィツキー 途上にある人 (P.203 ~ 249)

ラドヴィツキーはスペインにいた。ウルグアイで再び刑務所生活を送った後、内戦最中のスペインに赴き、戦闘に参加したのである。故郷は既にソ連になっており、戻ってもスターリンの粛清に遭うのは必至だ、彼はそう判断した。

持病の結核が悪化し戦場で倒れたラドヴィツキーは、アラゴンの前線を離れバルセロナに行く。バルセロナでは無差別爆撃が始まっていた。防空壕に逃げ込んだラドヴィツキーは隣り合わせた女性に思わず「リュドミラ...」と呼びかけてしまう。どこかリュドミラに似た彼女の名はレイナルダ。メキシコで労働者たちにアナーキズム思想を教えるための学校を創立したが閉校に追いやられ、逃げるようにしてスペインに来ていた。初めて一緒に出かけたカフェで、二人は互いの身の上を話し、協力して生きていこうと約束する。

戦火が激しくなっていく中、ラドヴィツキーと仲間たちはバルセロナを離れることを決めた。避難先でレイナルダと再会するが、結局、彼女と別れフランスに向かう。国境の鉄条網をかいくぐり首尾よくたどり着いたパリでレイナルダを待つが、届いたのは彼女がナチスに捕まって行方知れずになってしまったという知らせだった。

年ぶりの再会に、静かに酒を酌み交わす二人。大切にしてきたリュドミラの写真を見せ、その消息を尋ねるラドヴィツキーにロディオンは、彼女がある年の冬に収容所で死んだことを伝えるのだった。

附録 (P.250 ~ 270)

最後のパートには、著者がラドヴィツキーを題材として本作を執筆しようと思い立った経緯、謝辞、参考文献、取材先などが文章で記されている。その他、登場人物のイラストと写真も掲載。

所感・評価

ページのような印象を受ける。しかも、内容は一般に馴染みの薄い「無政府主義者の生涯」である。このような理由から、日本人のマンガファンが好んで手に取る作品とは言い難い。では、日本語に訳しても低評価しか得られないかと言えば、そうとも断言できない魅力が本作にはある。

物語は、ほぼラドヴィツキーの一人称で進行する。つまり、表情の少ない人々が行き交う冷たく灰色の景色は、深い悲しみを抱く主人公の心を通して見た過去の世界なのである。その点を意識すると、整い過ぎない画風で淡々と描かれていくストーリーが、フィルターをかけて撮った小品映画のような味わいを生み、緊迫したシーンにおける「静けさ」が、音声のない古い記録映像的なリアルさで迫ってくる。そして読者は、「無政府主義」「アルゼンチン」「スペイン内戦」のような本作品のキーワードは多くの日本人にとって馴染みの薄いものであるが、それらは表面的なものであり、作品の底を流れるのは「孤独」「愛」「友情」といった普遍的なテーマであることに気付くだろう。

一読した時点では、このような社会思想的なテーマを好むのは学生運動経験者か、社会問題を専攻する学生くらいだろうと思われた。だが、前述したような理由から、翻訳次第で読者層は広がりうると考えるに至った。登場人物のキャラクター、例えばだが、ラドヴィツキーを精神的に支えた女性たち、リュドミラ、レイナルダ、サルバドールなどの役割を引き立てるような訳を付け、台詞を短めにして作品の風格を損なわない程度のリズム感を持たせる。そのような工夫をすることで、あまり知られていない歴史を題材とした、興味深いヒューマン・ドラマに仕上がる可能性がある。

ところで、現実のラドヴィツキーにはリュドミラのように生涯慕い続けた女性は存在しなかった（いたかもしれないが、公の記録や証言にはない）。リュドミラは著者が創作した人物であることが附録に明記されている。ロマンスを加味することでラドヴィツキーの人生をよりドラマティックなものにするという意図は理解できる。しかし、それならば、冒頭で「事実に基づくフィクション」などと銘打っておいた方が良かったのではないだろうか。ほぼ事実という前提で読み続けた最後の最後で、物語の重要な部分を占めるエピソードが虚構だったと知り、空しさを感じる読者が私以外にもいるかもしれない。

試訳

(一段落がひとつの枠もしくは吹き出しの中の台詞に相当。 はラドヴィツキーの回想もしくは内心の声。吹き出

しの台詞は、鉤括弧で閉じ文頭に発話者の名前を付した。括弧内の文章は状況説明。)

P.174-179

(警察署長ファルコン暗殺決行のため、ラドヴィツキーは正装して出かける。手に握った包みには爆弾が入っている。)

せっかくコサック¹

殿にお目見えするのだから、エレガントな格好で出向いてやろうと思った。やつらは我が故郷を襲い、害獣を狩るみたいに無残に村人を殺した。今度はこっちがコサックを始末する番だ。だから、私は狩猟する側らしく、身なりを整えて行きたかった。

(出かけるラドヴィツキーを友人のルイージが見ている。)

多くの人を苦しめた、その報いをあの時ファルコンは受けたのだ。

私の行動は父をひどく悲しませた。復讐はまともなユダヤ人のすることではないと。しかし、私にとってあれは正義だった。

(街を歩くラドヴィツキーとその後をつけるルイージ。)

ゼロテ派²もローマ人の侵略から自分たちを守ったじゃないか。

少なくとも守ろうとした。

(ラドヴィツキーはレコレータ墓地の近くまで来る。)

11月のとある日曜日だった。レコレータ墓地で葬儀があり、ファルコンや上流階級の連中が大勢集まっていた。

(ルイージが訝しげにラドヴィツキーの様子をうかがっている。)

私は路面電車の停留所を背にして立っていた。乗客たちの喧騒が今も耳に残っている。春風が吹き始めた頃だった。

(ラドヴィツキーはファルコンの姿を確認する。)

全員目がけて爆弾を投げることはできなかった。コサックに関係ないブルジョワたちまで巻き込むわけにはいかない。私は人殺しがしたかったわけじゃない。君は分かってくれるよね、リュドミラ…。

(ファルコンが遺族に弔辞を述べている。)

ファルコン「奥さん、ご主人の逝去は我々警察にとっても甚大な損失です。彼はまことに素晴らしい友人でした」

(挨拶を終え、ファルコンは部下のファン・ラルティガウと馬車に乗り込む。)

ファルコン「さあ、行こうか、ファン。すっかり遅くなった。御者に命じて、後で君の家まで送らせよう」

ファン「ありがとうございます、大佐殿。それにしても、今日は見事な天気ですね」

ファルコン「ああ。素晴らしい陽気だ。この分だと今年の夏は大層暑くなるかもしれんね」

(爆弾を手に馬車の前方に回り込むラドヴィツキー。)

ラドヴィツキー「ディミトリの土産だ！ 喰らえ、コサック！」³[3]

(ラドヴィツキーはファルコンに爆弾を投げつける。衝撃とともに馬車から硝煙が上がる。)

人物A「そいつを捕まえる！」

(かるうじてファルコンの意識はあり、部下に安否を問う。)

ファルコン「ラルティガウ...君は大丈夫か？」

(必死に走るラドヴィツキー。)

リュドミラ...。あのままエカテリノスラフまで、ドニエプル川まで、走って行きたかった。君のところまで駆けて行きたかった。

でも、コサックから逃げたあの冬の午後みたいに私はもう走れなかった。

肺の中が空っぽで、身を隠す穀倉も見当たらなかった。

雑踏の中にルイーダがいた。付いてきてたのか。彼はこちらを悲しげに見ていた。私の行為を賞賛しているようでもあり、信じられないといった風でもあった。...ルイーダ、私はただの人殺しじゃない。正義のためにやったんだ。人に後ろ指を指されるようなことはしていないよ。

ルイーダ「シモン...」

(追っ手に包囲されるラドヴィツキー。)

人間は自らの最期の時を決めることができる存在だ。それこそが人の人たる所以じゃないか。それこそが人間と獣の違いなんだ。フェドセは正しかった。

(ラドヴィツキーは大粒の汗を流しながら、自らの胸に向け銃弾を放つ。)

1

[4

] ストライキ参加者を容赦なく弾圧したファルコンと、子供の頃に村を襲撃したコサック兵の姿を重ねている。

2

紀元元年前後に存在したユダヤ教の政治宗教的集団。目的達成のための暴力行為を是としていた。熱心党とも言う。

3 [6] この台詞はイディッシュ語で書かれている。

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/155-simon-radowitzky>

Links:

[1] <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/155-simon-radowitzky#sdfootnote1sym>

[2] <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/155-simon-radowitzky#sdfootnote2sym>

[3] <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/155-simon-radowitzky#sdfootnote3sym>

[4] <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/155-simon-radowitzky#sdfootnote1anc>

[5] <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/155-simon-radowitzky#sdfootnote2anc>

[6] <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/155-simon-radowitzky#sdfootnote3anc>